ダイアローグとモノローグ

河合宣孝

アマースト・カレッジで、英語のヒァリングの練習のつもりで気楽に二つの講義、ミクロおよびマクロ経済学の聴講を申し出た。すると、どちらの教授からも分厚い教科書と、次のようなことが印刷されている履修要項が渡された。講義の目的とそれに則した詳細な講義日程とアサイメント、練習問題やペーパーの提出日および中間・期末の試験日、さらには成績評価の方法など。ざっと見ただけでも、予習に最低限二時間はかかりそうである。そこで、「あまりにも負担が多いのではないか」と尋ねると、「この講義に限らずどの講義を取っても同じである」と。話しには聞いていたが、〝百聞は一見に如かず〟と気を取り直して、講義に出ることにした。

予め予習をしてきている学生は多分、シラケて退屈そうに講義を聴くのではないかと想像しがちであるが、この予想はすぐに外れた。予備知識を持つ学生からは、どんどん質問が出される。アメリカ人は自己顕示欲が強い国民だと思いながらも、それでは説明がつかない部分が、依然として残る。講義の回数が増えるごとに、不明瞭な部分がはっきりとしてくる。アマースト・カレッジの教師だけに限らないが、各教師には学生を引き付ける教授法が見受けられる。ある時には実際のデータを用いて、ある時には工夫された図表を用いて、現実の直面している経済問題を、どのようにしてどこまで分析可能かというような講義は、日本とは一味違うようである。どんな講義も、学生からの質問を通じてあるいは、それを補完するオフィス・アワーを通じて、さらには練習問題・宿題を通じて徹底される。

『ヨーロッパ・アメリカ・日本の教育風土』（麻生　誠・潮木守一編、有斐閣新書）の第二章アメリカの「自由と平等」というテーマのなかで、次のようなことが述べられているが、そのままアマースト・カレッジの学生にもあてはまる。「入り口での選抜のきびしい私立大学では、入学後も学生間のはげしい競争が展開される。この選ばれた学生たちはほとんどが四年間で卒業する。しかしかれらの大部分はさらに、医師・弁護士・経営者などの専門養成を目的としたプロフェショナル・スクール、あるいは研究者養成のためのグラジュエート・スクールつまり日本流にいえば、大学院への進学をめざしている。一流の大学院に進学するためには、しばしば十倍近い競争率

の難関を突破しなければならない。よりよい成績を求めて、かれらは遊ぶ時間はおろか眠る時間までつめて、猛然と勉強する」と。ある意味では「つめ込み教育」の過程は、学生の将来の野望と一致するが、そこにはつねに教師と学生の対話（〝ダイアローグ〟）がある。まさにこの過程は、教師と学生の信頼関係を萌芽させ、形成していく過程と言ってもよいだろう。

もちろん、教師の教育に対する態度や学生に対する面倒見の良さは、学生が毎学期、組織して行なう『スクリューティニー』（授業評点調査表）とかかわっているかもしれない。学生が教師の教育能力を評価するアンケートを『スクリューティニー』と呼んで、この結果は全学生、教職員に公表される。大学当局もこれを教師の雇用契約時に利用している。教師と学生の対話の環境づくりに、大学当局も一役買っている訳である。もっとも、テニュア（終身職の地位）を持っている教師には、そのアンケート結果がどの程度有効かは、はなはだ疑問である。いずれにせよ、教師と学生の間には徹底的な教育を通じて、つねに〝ダイアローグ〟があり、それが信頼関係を形成していくようである。

帰国後、約一年半余りの空白を埋めようとして、いろいろな雑誌や書物に目を通した。その折、「経済学を学ぶ人のために」特集（『経済セミナー』一九八一年四月号）に、飯田経夫名古屋大学教授の「経済学を学ぶということ」と題する論文が、掲載されているのを知った。その論文の冒頭のところで、「すでに十数年間、大学で経済学を――主として経済原論と題してマクロおよびミクロ経済学の概説を――講義してきた私にとって、やさしいテーマでなければならないはずだが、お恥ずかしいことに必ずしもそうではない」と、述べられている。飯田教授は近代経済学を教えることの難しさを卒直に認められているが、はたしてそうであろうか。

また、「大学で経済学を教える（諸君の立場からいえば、学ぶ）ことの意義に、みずからそれを長年の仕事としていながら、私はかなり強い疑問を抱いている。私は私なりに一生懸命教えても、はたして君たちはどこまで理解してくれるのだろうか」という下りは、日本の教師と学生の関係を暗黙的に示唆している。その関係を簡潔に言えば、教師から学生への〝一方通行〟あるいは、〝モノローグと言ってよいかもしれない。

飯田教授は結局、経済学を学ぶということは〝世のしがらみ〟をつぶさに点検することであり、そのためには「やはり、幅広い勉強をしてほしい。基礎理論をしっかり身につけるとともに、たとえば『日本経済新聞』を毎日精読して、現実経済の動きに親しんでほしい。さらに、狭く経済なり経済学なりだけに視野を限定する必要はまったくない。読書するばあいも、日々生活するばあいにも、つねに好奇心を失わないで、人間や社会の動きをみつづけてほしい」と結ぶ。『日本経済新聞』とか〝基礎理論〟とか一見、やさしそうな事柄のように思われるが、その中身は、決して容易に理解されるしろものではない。

たとえば、『日本経済新聞』に連載されている「やさしい経済学」というコラムは、これから経済学を学ぼうとしている者にとって、やさしい内容であろうか。ここ

最近の論題を挙げれば、「直間比率の経済学」、「マルクス経済学と近代経済学」、「メディカル・エコノミックス」等であり、むしろ「むつかしい経済学」とした方が、その内容と合致しているであろう。このコラムに限らず、まだ多々ある。

また、〝基礎理論〟とあるが、これも教師によって千差万別、教授法によっては難解な理論ともなりかねない。それで彼曰く、〝経済学とはディズマル・サイエンス（陰うつな学問）だ〟と。もっと手っ取り早い確かめ方は、本屋さんに行って、『近代経済学入門』とか、『……基礎理論』とかいう標題の本をパラパラ捲ればよい。そこに書かれてある事柄は、多少なりとも高等数学の心得がない限り、理解できないような内容ばかりであろう。したがって、こうしたことを念頭に置けば、飯田教授の「やさしいテーマでなければならないはずだが、お恥ずかしいことに、必ずしもそうではない」ということも納得できる。しかし、難解な講義や理論は、教師と学生の関係をますます〝モノローグ〟へと駆り立てていくだろう。

ところで、先のアメリカの学生に関する引用文を、日本流にしてみよう。「入り口での選抜のきびしい高校では、入学後も学生間のはげしい競争が展開される。かれらの大部分は、バラ色の将来への特急券（？）を得ようと、銘柄大学への進学をめざしている。そのような大学へ進学するためには、しばしば二十倍近い競争率の難関を突破しなければならない。よりよい成績を求めて、かれらは遊ぶ時間はおろか眠る時間までつめて、猛然と勉強する」と。ひとたび大学へ入学するや、かれらの大半は、染み付いたこれまでの「つめ込み教育」と、放任主義的な大学教育とのあまりにも大きなギャップに気がつくであろう。このギャップを〝自力本願〟ではなく、〝他力本願〟で埋めようとするのが、つねであるようだ。それ故、かれらはあらゆる方面から、講義内容と試験情報に心血を注ぐ。最近、本学でもこうした情報を難易度別に整理したパンフレット『間違いだらけの履修要項』なるものが、出回っているそうである。

日本では、学生が教師の教育能力を評価するなどということは、とんでもないことだと思う人が恐らくほとんどであろう。このような現状を踏まえれば、真に教師と学生の〝ダイアローグ〟は生ずるのであろうか。

アマースト・カレッジを通じてではあるが、徹底的なスパルタ式教育を目の当たりに見て、日本の大学の自由放任主義的教育を思うと、その差は歴然としてくる。内外から批判を受けた日本史の教科書検定問題を対岸の火事だと片付けてしまわないで、今後日本の経済学教育はどうあるべきか、真剣に検討する時期ではないだろうか。

（大学経済学部助教授）

天川村のこと

網谷正美

目を挙げると、四囲に迫る杉山の緑が朝日を反射して、ビロードのようにつややかだった。高く澄んだ空のここそこを、赤とんぼの群れが流れていく。何処とも知れぬ山の奥から、樵たちの使う電気鋸の鈍い響きが、時に空気を震わせて伝わってくる。それ以外に感覚を乱すものは何もない。

そういえば、昨夜はここで、八朔を祝う盆踊りが行なわれたのだった。酔った男たちの濁声があがり、手拍子と陽気な哄笑が山々に谺していた。その喧噪と熱気の名残りは、今は跡形もない。

このひっそりとした境内の一隅に、慈愛にみちた初秋の陽射しを浴びて立ちつくしていると、快さに気が遠くなる。時間が凝固し、自分の内部に何かがみっしりと充満してくるようだ。ふと気がつくと、肩にも頭にも赤とんぼが幾つもまっていた。——

七年前の八朔祭にはじめて訪れた天川村は、まるで幻想の中のユートピアのようだった。山河は美しく、人々は無骨だが暖かだった。それ以来、毎年数度は訪ねているが、村のたたずまいには今に少しの変わりもない。都会ではめまぐるしく移りかわる景観が、この天川村では自然と共にゆったりした速度でめぐっている。

天川村は、十津川上流の天川に沿うて細長く伸びた集落である。近鉄吉野線の下市口駅から、国道309号線を南へ車で約一時間、蛇のようにうねる細い山道と二つの峠を越えて、ようやく天川の清流にたどりつく。そこが天川村の玄関口、川合である。道はそこで二つに分かれる。左に折れて険しい坂を登りきると、大峯登山の宿泊地、洞川に至り、流れに沿って右へ進むと、やがて川向かいに、湾曲する川と背後の山とに抱きかかえられたような一角が見える。天川村の文化的中心、坪の内である。大峯連峰の弥山を祀る大峯本宮天河弁財天社は、ここにある。

中世における修験道の発展以来、この南都辺境の山奥に分け入る人々は跡を絶たなかったに違いない。今は夏期林間学校の小中学生で混雑する洞川の街頭でも、山伏姿の男たちを大勢見かけることができる。それに伴ってこの天河弁財天社も、安芸の厳島や竹生島、江の島と並び称される名社となった。

『大和名所図会』で見るかつての天河社は、広い境内の周囲に高い足場を組んだ回廊をめぐらし、その中央に社殿がひときわ

高く聳えている。いかにも山岳地帯の神社らしく剛毅峻厳な姿だが、現在の天河社ははるかに規模が小さい。それでも、杉の丸太で高く組み上げられた社殿の趣は、粗削りながらなかなか豪快である。玉砂利を踏んで仰ぎ見る弁財天は頭上遥かにましまして、親しく尊顔を拝むには、二十数段もの高い階段を上らねばならない。拝殿の背後はちょっとした谷になっている。眼下に点在する民家の屋根を望み、視線を転ずれば重畳たる山なみが見はるかされて、清涼の気が烈しく顔をうつ。

一昨年の夏、弁財天御開帳の大祭が六十年ぶりに行なわれた。はじめて拝見する天河弁財天女は、意外に厳しい顔つきで端座あそばしていた。天川の自然には、艶冶なお姿よりはこの凛然たるお姿の方がよく似合う。

弁財天は、ご自身琵琶を抱いておられるので明らかな如く、芸能を司る神である。天川社にも、往古弁財天八楽、又は弥山八面ともいう楽舞が伝わっていたという。

天授三年（一三七七）七月七日、南朝第三代長慶天皇吉野に行幸あり、和歌を詠ぜられた。

あさからぬちぎりもしるき天の川
はしはもみぢの枝を交はして

この時、お供した嘉喜門院が琵琶を弾じて和したというのも、弁財天に託した願いの切実さを感じさせ、あながちに故ないことではあるまい。天河社裏の山際に、低い生け垣で囲われた広場が残っていて、「南朝御所跡」と立札が打たれている。夏の朝など、一面に敷かれた芝生の間から露草が可憐な花をのぞかせたりする。ここから弁財天を仰ぎ見ながら、南朝廷臣たちが勝利と隆運を夢みて楽を奏でたと想像すると、ひときわ哀れ深い。

吉野の地は、古来敗残の将兵が天険を頼んで潜入することが多かったためか、悲運にまつわるロマンが多い。源義経の物語や南朝の歴史は人間の運命の哀愁を感じさせる。永享二年（一四三〇）には、時の将軍義教の寵を失って越智郷に流寓していた失意の観世十郎元雅が、弁財天社前の能舞台で『唐船』を舞っている。日本に捕われの身となった唐人祖慶官人が、十三年に及ぶ苦衷の末に許されて、喜び勇んで帰郷する、その祖慶官人を演じつつ元雅が凝視していたのは、父世阿弥とみずからの再出世の情景に違いない。その舞台で使用した阿古父尉の面は、演能後弁財天に寄進された。

唐船奉寄進　弁才天女御宝前仁為　允之面一面　心中祈願　成就円満也　永享二年十一月日　観世十郎敬白

面裏に墨書された銘の一字一字に切々たる願いが読みとられて、さぞ凄絶迫真の舞台を演じたであろうと思われる。

天河社の宝物庫には、この阿古父尉をはじめとして能面三十一面、能装束三十点余、小道具、謡本、関係文書など多数が陳列保存されている。いずれも室町から江戸初期にかけて、能楽草創期から円熟期にかけての貴重な資料である。これらの多くはかつての各社家に蔵されていた。子供たちの玩びになったり、髯の抜けた面に髯がわりの幣を糊で貼って祭に供し、祭果つれば川水で洗い流すという、滑稽な程おおらかな使われ方をしたらしく、保存状態は決して良くない。が、ともかくもそれらを採集

して一ケ所に保管したというのは、村の教育委員会の功績であろう。これらの資料は、天河社と能楽との深いつながりを示している。

大和にあった能楽各座が年毎に天河社での興行権を買い取った時代を経て、元和四年（一六一八）天河社に付属した能の座が成立したらしい。その社家座はやがて崩解するのだが、これら幾多の紆余曲折は未だ詳らかにしない。新しい資料の発見にまたねばなるまい。しかし、天河座がかつて能と共に演じた狂言は、「天川狂言」として今に伝わっている。

七年前の八朔祭の神前で、一人の老人が狂言を演じていた。彼の表情やしぐさには飄逸の味わいが深かったが、数人分の台詞を一人で喋るうえに、かなりの高齢のため声量がなく、訛の多い発音は極めて聞きとり難かった。記憶違いや台詞の脱落も多く、筋立てさえ判然としなかった。興が乗ってくると彼は今演じている演目を忘れてしまい、様々な狂言の台詞を思いつくまま支離滅裂に口走って、見ている私を茫然とさせたが、村人たちはそんなことにはおかまいなしに笑いころげた。この老人が天川狂言最後の継承者、西岡恒太郎氏だった。彼はかつて芸能者がそうであったように部落はずれの橋のたもとに住み、天河社の行事のたびに、弁財天に向かいその痩軀で狂言を演じてみせた。

その西岡氏も三年前に亡くなった。しかし、彼の手許に残された三種類の狂言記載本は、私の師匠、木村正雄氏によって校合されて、天川狂言の台本として一本にまとめられた。それを見ると、十二番の狂言のいずれもが大蔵流現行曲に極めて類似しており、天川狂言が正統の能狂言であったことは明らかである。

現在もこの台本をもとに、西岡氏の孫を含む数人の青年が木村師の演技指導を受けている。村人の手によって天川狂言を演じようとする「天川狂言」復活の努力に、天河社も教育委員会も援助を惜しんでいない。私が度々天川村を訪ねるのも、彼らの狂言上演の手助けをするためなのである。

一月五日には各地の信者を迎えて年頭の神事が行なわれる。五年前から、その場で『三番叟』を演ずるようになった。『三番叟』とは、能楽「翁」の後半部を狂言が担当して、五穀成就を寿ぐ舞である。

毎年この時期に雪が降ることは稀だが、舞台を吹き抜ける風の冷たさは刃物のように鋭い。数年前には、余りの冷気に笛が鳴らず、小鼓方の指が切れたこともあった。

今年の暖冬は天川村でも例外ではなかった。今年は私が勤めたが、舞っているうちに汗がしたたり落ちた。もう顔馴染みになっている何人もの村人たちが、あちこちから私を見つめている。その視線を全身で感じた。これからも何度となく、私はここを訪ねるだろう。この天川の村と、山河と、住民に深い愛情を感じつつ、私は力を込めて足拍子を踏んだ。

（高等学校教諭・大蔵流狂言師）

新島襄全集編集委員会編・同朋舎刊

新島襄全集 全10巻

■第1巻　教育編

解題・河野仁昭

わが国の近代教育の濫觴の時代に、偉大な先覚者の一人であった新島襄が抱きつづけた教育の理想と、その理想の実現をめざして苦闘した跡を雄弁に物語る教育関係草稿・諸記録など八〇余篇を、この巻に収録する。従来、「同志社大学設立の旨意」「同志社設立始末」以外はあまり知られていなかっただけに、キリスト教主義による私立大学の設立を企図した教育者新島襄の全貌が、これによって初めて明らかにされることになる。

本巻の後半をなす演説・論説草稿は、わが国で最も早く、よき時代のアメリカで組織的な近代教育を受けた新島の、キリスト教信仰と密接に結びついた思想と学術をうかがわせるものである。また、わが国近代教育の組織と理念を方向づけた『理事功程』の成立に、新島がかかわった跡を示す「理事功程草稿」も、この巻に収録する。

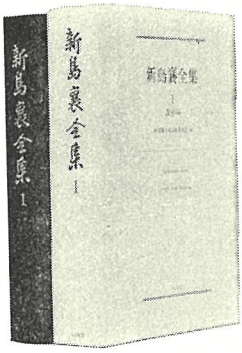
■第2巻　宗教編

解題・高橋　虔

教育者新島襄は、敬虔なキリスト者として、近代化の緒についたばかりのわが国で、大胆にその旗幟をひるがえし、また、キリスト教界の指導的役割を担った巨星でもあった。特にその晩年は、殉教者の感さえある。

文明開花期においてもなお、強い異教観と、キリスト教排撃思想の激しいなかで、日本に残した新島の、伝道の足跡は、京都を中心とする近畿一円から、中国、四国、九州、北陸、関東、東北地方にまで及んだ。それら各地で民衆に説いた説教と宗教演説の草稿を中心に、晩年、明治二十年におこった一致・組合両教会の合併問題に関する意見草稿、みずから創設した京都第二公会の「録事」、聖書を学んだ跡をしめす史料等、約一四〇篇をこの巻に収録する。

新島が奉じた教義とその理解についてはいうまでもなく、彼が



熱願していたキリスト教による民衆の教化と、熱烈な救国済民の使命感を、これらの史料が限なく明らかにする。ほとんどすべてが初公刊である。

■第3巻　書簡編Ⅰ

解題・杉井六郎

新島襄は書簡の人だといわれてきた。これは、彼にまとまった著述がなく、かつて書簡以外の史料が、あまり公にされなかったことにもよるであろうが、書簡において彼は、その思想や信条ひいては人間性を、もっとも自在に表現しえた、とみられるからであった。遺した量もまた豊富である。

彼の和文書簡は、従来約六八〇通が公刊されたが、この全集では新たに約二〇〇通を加えて、二分冊とした。

この巻には、嘉永五年に十歳の新島七五三太が、安中藩家老尾崎直紀に差出した書状にはじまり、明治二十年に至る約四〇〇通を収録する。ニュー・イングランドから、東洋伝道に赴く宣教師に托した祖国の肉親あての手紙には、肉親へのこまやかな情愛のみでなく、キリスト教に回心した新島の真情と、生活の様子が記されている。また、帰国後の、近親者や各界の人物、教え子たちに与えた書簡には、教育者であり宗教家である新島の、信仰と慈愛と苦悩と、そしてその使命感が、生き生きと記されて余すところがない。たとえば、岡山伝道中に八重夫人にあてた巻紙二メートル余の書簡など、留守宅の妻へのおもいがこまやかに記されるとともに、伝道状況の詳細な報告書ともなっている。

■第4巻　書簡編Ⅱ

解題・杉井六郎

明治二十一年から、四十七歳の生涯を閉じた二十三年一月までの約五〇〇通（年代不詳を含む）を収録する。

新島晩年のこの時期は、同志社大学設立のための募金運動がいよいよ大詰めを迎えたときであり、その運動に関する書簡が多い。しかし、その時期にも、当然ながら同志社での教育はおこなわれ、全国各地で伝道が進められていたのであるから、その関係の書簡も少なくない。そしてこの時期、悲願を訴える新島の声はいっそう熱を帯び、真情の吐露はいっそう端的になり、たとえば「良心ノ全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」といった不朽の象徴的な名句が記されたのであった。

わが国の開国・近代化に先がけて、近代のしぶきを全身をもって浴びた新島襄と、同志社、キリスト教界、さらには、彼が生きた時代の歩みを知る上で、新島が生涯にわたって綴った書簡は、不可欠の史料である。

■第5巻　日記・紀行編

解題・島尾永康

新島襄の処女航海の手記「玉島・兵庫紀行」にはじまり、最晩年の「漫遊記事」まで、彼の十六冊の日記・紀行類のすべてを、この巻に収める。従ってこの巻には、スリリングでドラマチックな「函館脱出之記」「航海日記」などの他、伝道や募金運動に際しての旅行日記などが含まれる。その大部分が初公刊である。

書簡をしたためることにおいて筆まめであった新島は、日記を記すことにおいても、またそうであった。しかもそれらの多くは、単なる日記ではなく、道中や、訪れた町々の地勢・産業・人情・名所旧蹟などをもルポルタージュ風に描いており、多数の自筆スケッチが添えられていて、往時の町や旧道、交通機関などに関する見聞録としても価値ある史料である。新島襄の全貌を知る上での史料的価値についてはいうまでもない。

この巻にはまた、新島が日記・書簡その他に書きとめた漢詩、和歌、俳句などを収録する。

■第6巻　英文書簡編　解題・オーテス・ケーリ

新島襄が実の父母のごとく慕い、また、その恩愛を生涯忘れることのなかったアルフィーアス・ハーディ夫妻に、二十五年間以上にわたって書き送った書信一一〇余通、アーモスト大学での恩師ジュリアス・H・シーリーあての書信二十余通、アンドーヴァー時代の寄宿先の人ミス・メアリ・ヒドゥンあての約五十通、アメリカン・ボードの総主事N・G・クラークにあてた二十五通の書信などを中心に、合計三二〇余通の英文書簡を収録する。

これらによって、新島のアメリカン・ボードへの期待や要請がなんであったかを知りうるとともに、同志社およびプロテスタント・キリスト教界の現況、彼の信仰と信条、願望や苦悩などとともに、義理固い人柄の一面をも知りうる。また、明治初期の日本人が綴った英文史料としても注目されよう。

■第7巻　英文日記・紀行編　解題・オーテス・ケーリ

新島襄がアンドーヴァー神学校在学時代に、岩倉具視を全権大使とする遣米使節団の一員田中不二麿に請われ、彼とともに欧米の教育事情を視察した明治五（一八七二）年以降、アメリカを去って帰国する明治七（一八七四）年までの間に記された三冊の日記・紀行をはじめとして、二度目の外遊中（明治十七～十八年）の六冊の日記・紀行ノートなど、十数点の英文史料をこの巻に収録する。恩人ハーディのすすめで書いた“My Younger Days”や、アメリカン・ボードに提示した“Schemes of the Speedy Evangelization of Japan”などもこの巻に収める。これらの史料は、“My Younger Days”を除いて、かつて公刊されたことがなかった。

欧米諸国の文化や風物に、新島は何を見、何を感じ、何を学びとったか。そしてまた、それら諸国でどのような人物に出会ったかを、直接語る価値ある史料である。新島自筆のスケッチ多数を本文中に添える。

これらの史料もまた、明治初期の一日本人が、英文で綴った資料としても注目されよう。この巻にはまた、書簡、日記・紀行以外の英文史料をすべて収録する。

■第8巻　補遺・雑纂編　解題・河野仁昭

補遺、断簡、学習ノート、募金関係史料、伝道関係史料、葬儀

関係史料、民治・八重ら新島家史料、新島先生遺品庫収蔵目録、新島旧邸蔵書目録、新島襄年譜、その他。

新島襄の史料を網羅し、より完璧な全集にするという編集方針に従って、この巻は編まれた。これらの史料は、単に補足的な役割を負うにとどまらず、新島の全体像を知る上において不可欠の史料だといいうる。

■第9巻　来簡編

解題・杉井六郎

同志社は、諸家より新島襄に送られた和文書簡約一千通を収蔵する。これらは、田中不二麿、木戸孝允、井上馨、富田鉄之助、北垣国道ら、当時の政財界の要人からのものをはじめ、津田仙、中村正直、押川方義、井深梶之助、内村鑑三らキリスト教界・教育界の指導者たちからのもの、徳富蘇峰、小崎弘道、横井時雄、金森通倫、宮川経輝ら同志社出身者からのもの、松山高吉、湯浅治郎、中村栄助、父民治、義理の甥公義ら同志関係者および肉親からのものなど、多彩な人物からのものである。

これらの来信を厳選して編集されるこの巻は、新島がかかわりをもった人物と、その交際の内実を知りうるのみでなく、新島書簡と相互補完の関係をなす史料集としても価値あるものである。

■第10巻　『新島襄の生涯と手紙』(訳)　A・S・ハーディ編著

解題・北垣宗治

編著者 Arthur Sherburne Hardy は、新島襄の米国における最大の恩人アルフィーアス・ハーディ夫妻の三男で、大学教授であり、作家であり、外交官でもあった。彼は、父母から愛され期待された新島より四歳年少で、十八歳のとき新島に出会って以来、ふかいまじわりをもった人である。

そのA・S・ハーディは、父アルフィーアスの死後（一八八七年八月）、新島が二十五年間以上にわたって両親に寄せた手紙や、父の求めに従って新島が書いた「脱国の理由」、「青春時代」(My Younger Days) などが遺されていることを知り、その編纂を思い立ったのであった。そして彼は、わざわざ調査のために来日するほどの綿密周到な事実と史料の調査をこれに加えて、新島永眠の翌年、明治二十四（一八九一）年に *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* と題して、ボストンからこれを上梓した。新島自身の手になる手紙や手記などにより、直接新島その人に、その生涯を語らしめようとしたこの書は、早くから新島を知る上で不可欠の文献とされてきた。これが日本語に翻訳されるのは初めてで、訳者は先年、J・D・デイヴィス著『新島襄の生涯』を、きわめてよくこなれた口語に訳されて定評のある北垣宗治教授である。

（河野仁昭）

《刊行予定》昭和58年2月刊行開始（以下隔月刊）。第1回配本／第1巻教育編・第2回配本／第2巻宗教編・第3回配本／第5巻日記・紀行編。
●全巻予約受付中。
お問い合せは同志社収益事業課（☎〇七五―二五一―三〇三八）まで。

新島襄全集について

杉井六郎

天保十四年一月十四日（一八四三年二月十二日）生れの新島襄は今年が生誕満一四〇年に相当する。こうした区切りになる時期に、年来の懸案である『新島襄全集』が刊行されはじめたことを無上の喜びとするものである。すでにご覧頂いているように、第一巻教育編の初刷印刷日を二月十二日にしたのは新島襄全集編集委員会のささやかな寓意の存するところである。引き続いて、これを刊行し、全十巻の刊行をなしとげることは嶮難の坂路をたどることになるけれども、一呼吸のひるみも戒めて、ひたすらにこの編集刊行の事業を完成しなければならぬと思っている。それは新島襄の全遺稿を公表し、はじめて新島襄の全体像を世に問おうとする全編集委員の熾烈な意識であり、かつはこうした編集、刊行の運びになるまでには、長い道程があったが、これに係わった多くの人々の業を心に深く思う感懐にたっている。

ちょうど新島襄生誕一〇〇年に相当する昭和十七年一月に、森中章光氏らの努力によって『新島先生書簡集』が発刊された。これは新島襄史料の最初の集大成であり、新島襄没後五十年をも記念するものであった。ついで昭和三十五年には、その続編が刊行され、改訂増補された新島襄先生詳年譜を付載し、いわば「書簡の人」としての新島襄はほとんどその全容をあらわしえたと言いうるものであった。しかし、この『新島先生書簡集』、『新島先生書簡集　続編』はともに発行部数を限定したために、今日では稀覯書とは言いえないけれども、古書としてきわめて高価であり、なかなか入手しにくいことは周知の通りである。この正続二冊の書簡集の刊行のはざまに、岩波文庫本として『新島襄書簡集』が昭和二十九年に刊行された。いうまでもなく、これは『新島先生書簡集』から選択し、校訂転載したものである。しかし、この文庫本は現在絶版になっており、もはや、入手することは困難である。これらの新島襄書簡の刊行に続いて、その後、書簡以外の新島襄史料が、これまた森中章光、加藤延雄氏らの手で『新島研究』に紹介されてきた。『新島研究』に掲載、紹介された新島襄史料は、かれの日記、演説、説教草稿、新島家記録および、新島研究にとっては未開拓の分野のものであったが、しかし、刊行部数はすくなく、学術誌というよりむしろ同好会誌的な性格もあったため、日本近代思想史、教育史など、ひろく斯界の注目を

あびるものではなかった。筆者はかつて「新島襄の史料はやはり書簡だけですか」という述懐にも似た言葉を東京のある出版社の編集担当者から耳にしたことがあった。それは『新島先生書簡集』の序文を書いている徳富蘇峰、ついで岩波文庫本『新島襄書簡集』で、同志社新島襄伝記編纂委員が自ら凡例で述べていた「書簡の人」というイメージがひろく流布伝播してひさしく、かつはまた、同志社における新島襄全集の企画が停滞し、かれの全体像を世に送ることが遷延に遷延を重ねていたことに由来していると言わざるをえない。

新島襄の史料は、では一体どのようなものが、どの程度あるのか。全集の編纂の基礎的作業として、あらかじめおこなわれた『新島遺品庫所蔵目録』（上下二冊）の刊行は、すでにその量の大きにおよぶことを予測せしめていたが、さて、史料の部類別編成をおこなって『新島襄全集』全十巻を構成するにいたった。すでにご承知のように、その十巻は書簡編二冊のほか、教育編、宗教編、日記・紀行編はそれぞれ一冊を編成するわけであり、さらに英文書簡編、英文日記紀行編の二冊、そして修学ノート、募金ならびに伝道関係史料および新島家記録などを補遺雑纂編として、合せて八巻にわたる。それに新島襄にあてられた来簡編およびA・S・ハーディーによる *"Life and Letters of Joseph Hardy Neesima"* がはじめて翻訳されて「新島襄の生涯と手紙」として、すべて全十巻とするものである。部類別の編成をとったために、各巻の分量は異同が生れることが予想されるが、第一巻教育編は七〇〇ページにおよぶものであり、第二巻宗教編も七〇〇ページになんなんとする、いわば従来の疑念を一掃して、ここにはじめて全十巻を構成し、新島襄の全貌を世にひろく送ることになった。キリスト教史学会の著宿である国際基督教大学客員教授の海老沢有道博士より新島襄の思想の中心は「宗教編」に違いないという推薦の辞を寄せて頂いたが、この全集を発刊することによって、従来の「書簡の人」という新島襄像は大きく塗りかえられ、その全体像をはじめてあらわすことになるわけである。

さて、しかし、ここに収録することになった同志社が襲蔵する史料のほとんどは、新島の手になるものであることは言うまでもないが、それらは概ね草稿であって、その生前に公刊され、世の評判をえたような著作、論稿、論策はきわめてすくない。また演説、説教の類も当時のキリスト教系、あるいは一般の新聞、雑誌に掲載された例は乏しく、需めに応じてしるした序跋の類も、これをもって序跋録をあむことはできない。かかる意味では、これらの多くはかれ自らの所見、感懐を公表し、その適否を世間に問うため準備したものではなく、かれの内部において燃焼する魂とその思考の過程を書きとめた形態の文書である。もちろん、日記、書簡のように比較的に整序された形をとっているものもあるけれども、その他の多くは、朱墨あるいはペン、鉛筆によって抹消、訂正、挿入を繰り返し、改訂、増補のいちじるしい文書であり、まさに盤根錯節の生原稿とも称すべきものである。和文、英文とも、その記述において、その料紙は多岐にわたり、手元の覚えとして筆をはしらせた文書が多い。かかる点では、これらの史料は新島襄の思考の過程、

あるいはその推移、いわば心の襞を窺うことができるといえば、まことにその通りであるが、行文の脈絡をなかなかつかみきれず、索緒の困難を思って、思わず吐息をつくことがしばしばである。

由来、著名の全集といわれる書物の大半を構成しているのは、その著者の生前もしくはその没後にいたって公刊された刊本を収録して、これをもって編成しているもので、残存する元原稿との綿密な校合、校訂をおこない、これを世に送る編集の企画はすくないと言ってよい。新島襄の全集を出すに当って、まさに校合、校訂すべき照合資料を欠いた文書を、原文書の影印という形態をとらず、原文の全容を忠実、丹念に原稿化し、これをいかに読者の前に呈示するかという編集方針の決定は編集委員会が背負った当然の課題であった。

いまその第一巻が刊行されて、その作業の結果が皆さんの前に呈示されている段階で、改めて編集の責任のきわめて重く、かつ大きいことを繰り返し思っている。一般にかかる書籍を手にして、その「凡例」を精読し、しかる後にその巻首から順次に、これを丹念に通読することは余り行なわれないことであって、とくに、このような史料を編集して全集としたものにおいては、一般に関心のあるところを選択して渉猟することが多いから、不注意による誤植と思われ、あるいは編集の不行届き、不徹底と考えられる場合もままなしとしない。この問題は、今回はじめてその全容を紹介発表することになった英文書簡ならびに英文日記・紀行編の編集においても苦慮、呻吟を重ねたところであった。オーテス・ケーリ教授の手元には新島文書用の〝英文辞書〟があまれていた。これらは編集委員の苦悩に満ちた弁解の辞をつらねるようであるが、この際、申し述べておかなくてはという気持である。

本全集はしばしば述べてきたように、新島襄の全体像を世に問うものであることはいうまでもないが、従来のとくに「書簡集」の域を摩した特色の一つは、赤裸々な人間新島襄像を忠実に伝えようとしたことにある。従来の書簡においては、新島襄に対する顧慮から、史料のある部分を省略の符号でしめして、その掲載を取止めたところがあったが、これらの箇処はすべて原文通り、全文が収載されていることである。二つは朱墨などによる訂正、削除、挿入などの部分を明確にしめし、とくに抹消部分でも重要と思われるものは、これをおこして行文のなかに収めることに努めたことである。三つは書簡など史料の渉猟を国内に進めて従来の収集数を摩し、かつアメリカ所在の書簡ならびに記録を隈なく調査し、これを収載して、内外からの史料の双射が試みられるように努めたことである。四つは新島襄が受けとった来簡を収めて、新島の交わった人々の心情から新島襄を考える方策を企図したことである。

筆を擱くにあたって編集事務局の労苦をたたえ、かつ本全集のひろくひろまることを祈念するものである。

（大学人文科学研究所教授、新島襄全集編集委員）